経済学部における異文化体験型学修の意義について
― モタンカ人形づくりを通して ―

Goral Nadiia　　伴　ひかり　　木暮　衣里

はじめに

2022年度後期より経済学部に外国人客員教授として着任したGoral Nadiia（ナディヤ･ゴラル）は、「経済学特別講義Ａ・Ｂ」、「実践力育成Ｆ」を担当している。「経済学特別講義Ａ・Ｂ」はウクライナの歴史・政治・経済・文化などに関する講義で、「実践力育成Ｆ」には、ウクライナ文化の紹介と実践が数多く含まれている。

本稿では2022年度後期の「実践力育成Ｆ」で行われたウクライナの伝統的な人形であるモタンカ人形づくりをとりあげ、その異文化体験型学修の意義と学生への影響を報告する[1]。授業中の学生の様子や感想文から、異文化体験型学修が講義だけでは得られない異文化への関心の高まりをもたらすことがわかった。また、人形づくりにおける分業や協業は、コロナ禍で対面での会話に制約を受けてきた学生にとって、初対面の人とのコミュニケーションのきっかけになったようである。

本学経済学部の科目には異文化の制作実習を含む授業は筆者が知る限りなく、異文化体験型学修が学生にどのような影響を与えるか、どのような準備が必要か、課題は何かを記録することは意義があると思われる。また、モタンカ人形の制作手順を日本語で記すことは、微力ではあるがウクライナ文化を知ってもらうことにつながるかもしれない。

１．モタンカ（MOTAHKA）人形とは

モタンカ人形とは、ウクライナの国民的なお守り人形である。「モタンカ」という名前はウクライナ語の「巻きつける」を意味する動詞に由来している。お守り人形をつくる際、針とハサミは一切使わず、人形の体の部分や服を糸で巻きつけることから、文字通りに「巻きつけられた人形」（モタンカ人形）と呼ばれるようになった。モタンカは家族の絆を表したお守り人形である。昔のウクライナ人はモタンカ人形を作るために、母親や祖母が着ていた刺繍された伝統的な服の一部や糸しか使っていなかった。ウクライナの文化では糸が「縁結び」とつながりがあり、なるべく糸を切らないように人形を作ることが大事であった。人形の服に母親や祖母の古い服の布が使われていた理由は、伝統的な刺繍が施された服が体を守ってくれると信じられており、捨ててはいけないためである。この人形の最大の特徴は目がない顔である。その理由は、目を通して人形に悪い魂が移り、恐ろしい者になる恐れがあると信じられていたためである。そのため人形の顔が白いままで残されていたか、糸で十字の形に結ばれていた。モタンカ人形の十字に結ばれた顔はキリスト教との関係

経済学部

はなく、古代の太陽神のサインを表している。モタンカ人形を一体でも持てば、その人を災いから守り、幸せや富を呼び込むと考えられている。モタンカ人形にはいくつかの種類がある。

- 「離れ離れ無し人形」は手が繋がったペアの人形で、結婚式の贈り物として利用された（写真③）。
- 「花嫁」という人形も、結婚する娘の為に母親が作って持たせた。
- 「十本手持ち」人形は、仕事、家事、育児で忙しい女性を見守り、手を貸してくれる。
- 「おひな巻き」人形は、頭はそばの実、小麦、トウモロコシの種から作られていた。泣いている子供を落ち着かせるために、マラカスのように使われていた。

今回のモタンカ人形は、Iryna Parkhomenko（イリナ・パルホーメンコ）先生より筆者（Goral）が受けた指導に基づく。先生のモタンカ人形は芸術性が高く、欧州議会にも展示されている。

写真①　Iryna Parkhomenko 先生

写真②　Parkhomenko 先生の指導で制作したモタンカ人形を持つ筆者（Goral）

写真③④　Parkhomenko 先生の作品の一部（Facebook より許可を得て転載）
写真③（左）が「離れ離れ無し」人形

２．準備

(1) 教室

もともと「実践力育成Ｆ」は通常の講義室で行われており、作業をするには適当ではなかった。幸い、有瀬図書館５階の「ラーニングコモンズ」を使用できた。各テーブルに数人ずつ着席することにより分業や協業が可能になった。また、教材を置くテーブルも確保でき、スムーズに作業を進めることができた。

(2) 教材

授業準備をするに当たっての問題は、大人数の学生にどのように布や糸を提供するかであった。当初想定していたモタンカ人形では、顔、体、腕、及び二重のドレスなどいくつものパーツの布を用意する必要があった。しかし、布の扱いに不慣れな学生が大きな布を適切な大きさに裁断することは難しい。そこで、なるべく裁断箇所を少なくする工夫をした。スカートには18cm角のフェルトをそのまま利用した。顔の中の布はカット綿に、体はボール紙に代えた。布用でない普通のハサミでも簡単に切ることができるよう、顔の表面はガーゼ、腕はレース生地、ヴェストコート（上衣）はフェルトを用いた。また、スカートを一重にした代わりに、裁断が容易なリボンのエプロンをつけた。リボンはなるべくウクライナのフォークロアを感じられるようなものを選んだ。糸については、ビニールひもで必要な長さの見本を何本か用意し、それに合わせて学生が切るようにした。

材料（人形一体分）：カット綿（8cm × 16cm）２枚、ガーゼ（30cm × 30cm）１枚、スカート用のフェルト（18cm × 18cm）１枚、ヴェストコート用のフェルト（2cm × 18cm）２枚、レース生地（8cm × 16cm）１枚、エプロン用リボン（3cm × 18cm）１本、飾り用リボン、レース糸、毛糸、体用ボール紙（10cm × 20cm）１枚、セロテープ、新聞紙

道具：ハサミ、定規、布用ペン（時間が経つと消えるタイプ）、型紙用ボール紙、尺度用ビニールひも

(3) 制作工程の単純化

細かな手作業を大人数の学生に指示し実践させることは容易ではない。できる限り１つ１つの作業工程を単純化する必要がある。例えば、布を切る作業については、ボール紙で作った型紙を用意した。学生は布に型紙を置き布用ペンで印をつけ切ればよいので、測る必要がなく、寸法を間違えることもない。

(4) 制作工程の効率化

作業工程を効率化するために、分業・協業を取り入れる必要があり、あらかじめその計画を立てておく必要がある。例えば、先の例では、誰が布に印をつけるか、誰が布を切るかを指示する必要がある。

(5) 制作工程の伝え方

各テーブルに当日の作業を図でわかりやすく説明したものを置いた。顔の糸の掛け方は事前に動

画を録画し、プロジェクターで繰り返し流すことにした。

(6) その他

アルコール消毒、ごみ袋を準備した。また、人形づくりは複数回にわたるので制作したものを個別のビニール袋に入れ、預かることにした。

3．制作手順

ここでは、授業用にアレンジしたモタンカ人形の制作手順を説明する。

(1) 頭の詰め物

薄く剥いだカット綿（縦 8cm ×横 16cm）を 2 枚用意する。縦の長さが 5cm 程度になるよう上部を 3cm ほど折り込み、厚みがなるべく均一になるようカット綿を重ね合わせ、軽く巻く。おおよそ横が 4.0 ～ 4.5cm、縦が 5cm の頭の詰め物をつくる。巻き終わりは糸やセロテープで留めておく。

(2) 頭

ガーゼ（30cn × 30cm）を対角線が十字になるようにテーブルに広げる。横の対角線のやや下方に（1）の詰め物を立てて置き、ガーゼの上部の角を下部の角にもってくるように被せ、またガーゼの左右の角を後ろにたたむようにし、てるてる坊主の要領で首にあたる部分に糸を巻きつけてくくる。以下、糸でくくった所を首、ガーゼをたたみ込んだ側を背面、反対を正面と呼ぶ。

(3) 顔の糸掛け

今回は２色のレース糸で顔に糸を掛ける。

①まず、赤色の糸を背面に置き、糸端を 10cm くらい残して首に反時計周りに３回巻きつけ、糸が背面に来るようにする[2]。

②背面から糸を縦方向に回し、頭のてっぺんを越え、正面にもってくる。顔の左右の中心を糸が通るようにして首元まで下ろす。正面にある糸を首の周りを反時計周りに１回転させ再び正面に持ってくる。

③正面から糸を縦方向に回す。この時先に掛けた糸の右側を沿うように糸を掛け、頭のてっぺんを越え、背面にもってくる。糸を首元まで下ろし、背面にある糸を首の周りを反時計周りに１回転させて再び背面にもってくる。

④背面から糸を縦方向に回し、頭のてっぺんを越え、正面にもってくる。先に掛けた糸の左側に沿うようにして糸を首元まで下ろす。正面にある糸を首の周りを反時計周りに１回転させ再び正面に持ってくる。

③と④を繰り返し、糸が５本並ぶようにする。正面から縦方向に糸を回す時は、正面の既存の糸の右側に、背面から縦方向に糸を回す時は正面の既存の糸の左側に沿わし、正面の首下でクロスするようにする。

縦方向の糸掛けが終わったら、顔の中心を通るように横方向に糸を５回し、ほどけないよう糸の後始末をする。

次に、①、④、③の手順で青糸を縦方向に掛ける。先に掛けた赤糸の左右に３本ずつ掛ける。横方向にも赤糸の上下に青糸を３本ずつ掛ける。

(4) 体

ボール紙（20cm × 10cm）の短辺を巻き直径２cm 弱の筒状にし、セロテープで留める。(3) の顔の下に広がるガーゼを筒状の体に被せ、糸で巻きつけて固定する。首のすわりが悪い場合は、少量のカット綿をボール紙の先端にのせ、ガーゼをしっかり下方にひっぱるようにするとよい。

(5) 袖（腕）

白いレース布（20cn × 9 cm）の短辺を軽く巻き、両端を赤い糸で袖口のリボンのように結び、袖（腕）を作る。

(6) 体の完成

(5)の袖（腕）を（4)の体の背後に置き、糸を使って腕の位置に巻きつける。糸は後ろから左右の袖の下に通し、クロスして何回も巻きつけて固定する。

(7) 服（ヴェストコート、スカート、エプロン）

２枚の細い布（2cm × 18cm）を体の前でクロスして肩に被せる。体の後ろでもクロスさせ、糸で巻きつける。ヴェストの上からウェストの位置にフェルト（18cm × 18㎝）のスカートを被せ、糸で巻きつける。スカートの上にエプロンを置き、糸で巻きつける。ウェスト部分にリボンを巻き、糸を隠す。

写真⑤　筆者（伴）が制作したモタンカ人形のサンプル

(8) 髪

ボール紙（20cm × 10cm）の 20cm の長さの辺を使って、毛糸を巻く。人形の髪になるくらいの分量の毛糸を巻き､1 か所を結んで輪にした後､ボール紙から外す。結び目から約 10cm のところをはさみで切り、髪にする[3]。

(9) 三つ編み

(8)でつくった髪を頭にのせ、丁寧に分け目をつくり、首に糸を回して髪をくくりつける。後ろで三つ編みにし、リボンで飾って完成させる[4]。

４．実際の授業の流れと学生の様子

第１回（2022 年 11 月 17 日）　準備

モタンカ人形についての講義を行った後、グループに分かれて顔･体･服のパーツとなる布をカットし、モタンカ人形づくりの準備を行った。

- ガーゼは 30cm × 5 mの大きさのものを 3 枚用意した。30cm × 30cm の型紙を 3 枚準備し、学生に裁断を依頼した。
- レースは 45cm × 1 mの大きさのものを 2 枚用意した。まず、20cm × 45cm の型紙（布用ペンの太さを勘案して実際の型紙は 19.9cm × 45cm）を 2 枚準備し、学生に 20cm × 45cm の印付けと裁断を依頼した。さらに、9cm × 20cm の型紙（8.9cm × 20cm）を 4 枚準備し、学生に 9cm × 20cm の印付けと裁断を依頼した。
- ヴェストコート用のフェルトは、18cm × 18cm の大きさのものを 10 枚用意した。2cm × 18cm の型紙（1.9cm × 20cm）を 10 枚準備し、学生に 2cm × 18cm の印付けと裁断を依頼した。
- エプロン用リボンは 2m のものを 4 種類用意した。18cn × 5cm の型紙を 4 枚準備し、学生に 18cm ずつのリボンの裁断を依頼した。

第 2 回（2022 年 11 月 24 日） 頭・顔・体・袖（腕）の制作

- 制作手順の（1）・（2）に従い、各自人形の頭部を作製した。
- 顔に巻くレース糸のカットのため、尺度となる 1.8m 程度のビニールひもを数本用意し、それを利用して赤と青のレース糸を人数分切るよう学生に依頼した。
- 制作手順の（3）に従い、各自人形の顔に糸を掛けた。
- 制作手順の（4）・（5）・（6）に従い、人形の体の制作を進めた。

第 3 回（2022 年 12 月 1 日） 体の完成、及び服・エプロン・髪の制作

- 制作手順の（4）・（5）・（6）に従い、人形の体を完成させた。
- ドレスとヴェストコート、エプロンの色を選ばせ、制作手順の（7）に従い衣服を完成させた。
- 髪の毛に利用する毛糸を選ばせ、（8）・（9）に従い、仕上げの作業を進めた。

第 4 回（2022 年 12 月 8 日） 人形の完成と記念撮影

最終日は 1 ～ 3 年次生の約 30 人が受講した。完成した人形を互いに見せ合ったり、人形を集めて写真を撮ったりするなど、和やかな様子が見られた。学生たちは完成した人形を持ち、Goral、伴と記念撮影を行った。4 回の授業の様子は、本学広報 Topics に掲載された。
https://www.kobegakuin.ac.jp/education/faculty_economics/news/7447b7e8894a705308d3.html

5．学生の感想

いくつかの項目について学生に感想を書いてもらった。主要なものを整理して紹介する。

（1）受講の動機

・ウクライナのことが話題になっていたが、詳しくは知らなかったため、知りたくて選択しました。
・将来外国に行きたいので、様々な外国の知識が欲しかった。
・経済学部で外国の文化について学ぶ授業がもともと少なく、「実践力育成 F」では文化体験授業

があると聞き、受講しました。日本の文化との違いにも興味があります。

・ウクライナの先生が授業をするとシラバスに書いてあったから。外国人の先生の授業を受けてみたいと思いました。

当然のことであるが、ほとんどの学生がウクライナへの関心を受講理由に挙げた。次いで外国一般について興味があるからと答えた学生も多く、ウクライナまたは外国への関心が受講理由の主要因と考えられる。また、文化体験や外国人による授業であることを理由に挙げた学生も複数いた。

(2) 人形づくりについて

・モタンカ人形づくりははじめてなので難しかったですが、とても楽しかったです。

・先生や友達と協力してより良い人形をつくることができました。モタンカ人形づくり最高でした！

・一緒に授業を受けている、他の人たちとも交流があって新鮮で楽しく授業を受けることができました。学生同士だけでなく先生たちとも交流ができたのがよかったです。

・ウクライナ伝統のものをつくることができ、貴重な経験になりました。

・今回の授業を通して、モタンカ人形づくりもひな人形づくりもその国の伝統や文化を学ぶ上でとても大事なことだと改めて知ることができた。

・お守りを作ることは人々の不安や悩みを解消してくれるものだと思うので、それで文化が成り立っているのは良いことだと思う。

「楽しかった」との感想がほとんどであった。また、他の学生や教員との交流を評価する学生も多かった。実際に人形を作ることを通して文化への認識を深めた学生もいた。また、「お守りということなので、家に飾りたい」、「自分の作ったモタンカ人形と一緒にウクライナに旅行したい。人形にウクライナを見せてあげたい。」など自作の人形への愛着を示す者もいた。

(3) 授業後の感想

・授業ではウクライナの文化を聞くだけでなく、体験することもできて、なかなかできることではないので、この授業を受けてよかったです。

・ウクライナ伝統のものをつくることができ、貴重な経験になりました。大学でものづくりという経験が一度もなかったので、高校に戻ったような気持ちになりました。

・ウクライナのことはあまり知りませんでしたが、体験型授業で楽しく学べました。

・これまで外国の文化についてここまで深く学んだことはありませんでしたが、ウクライナ以外の国の文化にも興味がわいてきました。

・ウクライナのイメージがより良くなりました。

・ウクライナに行って現地の方々と交流したい。

体験型授業を評価する感想が多かった。異文化についても、学生たちの関心がさらに深まったことが伺える。また、ほとんどの学生がウクライナに行ってみたいと答えており、授業を通してウクライナへの関心が高まったようである。

(4) ウクライナと日本の文化の共通点について

・共に自然の神様を祭っている点や、似た神様や妖怪がいること。コサックのような日本の武士に

似ている存在があったことです。

・日本とウクライナの共通点として、伝統的な文化の中に、人形を作ったり、飾ったりするのがあると思います。日本でも伝統的にひな人形を飾ったりするので、ウクライナにも似た文化があるのでびっくりしました。

・伝統文化を大切にしているところ。

・行事ごとにお祝いをする点。

・どちらも平和を望んでいること。

・どちらも人が親切。

・家族を思いやる心や考え方、人や物を大切にしているところ。

ウクライナの文化の学びを通して、学生たちは日本文化についての認識も深めたようである。

6．共著者からのコメント

Goral 先生が担当する「実践力育成 F」では、ウクライナの伝統的な人形づくりをはじめウクライナ文化の実践が数多く含まれている。これらは学生にとって極めて貴重な異文化体験であるだけでなく、その作業を通して学生は協業すること、自分自身の個性を発揮することを体現している。また、授業における Goral 先生の対話を重視した双方向の講義スタイルは、様々な問いかけに対して思考したり自分の意見を発表したりする場を学生に与えている。

経済学部のディプロマ・ポリシーは、「知識・技能」、「思考力・判断力・表現力等の能力」、「主体性を持って多様な人々と協働して学ぶ態度」から成るが、3 番目の「協働して学ぶ態度」の修得は講義科目では難しい。Goral 先生の授業はその修得において大きな貢献がある。

2017 年 6 月には文化芸術基本法、同年 12 月には文化経済戦略が策定され、文化芸術による経済成長や地域振興がより期待されるようになってきている。しかしながら、文化芸術の価値は経済的価値ですべて置き換えられるわけではなく、経済学部の学生にとっても文化を知り、それを大切にする気持ちを養うことは、貴重な学びとなる。（伴）

Schmitt（1999）による経験価値マーケティング（Experiential Marketing）、Pine and Gilmore（1999）の経験経済（Experience Economy）、Vargo & Lusch（2004）の価値共創（Co-Creation of Value）等により、今日のマーケティングではモノでなく経験によって消費者が得られる経験価値や、企業が顧客と共に創り上げる価値共創が重視されている。Pine and Gilmore は経験には 4 つの領域があり、夢中になりつつ積極的に参加するという領域に教育（Education）があると述べた。また Prahalad and Rawasmamy（2000）は 2000 年以降、顧客は企業にとって価値を共に創るパートナーに変化したと指摘した。今日は社会に存在するいかなる組織もマーケティングと無縁でいることは困難であり、非営利組織である大学も学生から選ばれるという意味において同様である。経験価値、価値共創という視点で見た場合、学生ひとりひとりが自分だけのモタンカ人形を作り上げる Goral 先生の異文化体験型学修は、経験価値と価値共創が実現された貴重なものである。また教員と学生が対話し、協力し合うことで豊かな授業内容を共創することは、大学における「学びの価値」を高める上でも今後ますます重要になると考える。（木暮）

終わりに

神戸学院大学の経済学部でウクライナに関する授業を担当することになり、大変うれしく思っている。経済学部の先生方、学部長室と図書館の方々のご協力のおかげで、シラバスに載せた様々な活動（人形づくり、お正月飾りづくり、塗り絵など）が実現でき、心より感謝を申し上げる。

2022年度後期の「実践力育成F」という科目は、61人の学生が履修した。初めての授業の前に学生の名前リストを見たが、実際に教室に入ると男子学生が多く大変驚き、シラバスに載せた文化体験の活動のこと（特に人形づくり）が不安になった。来日したばかりの私は人形づくりの材料をどこで買えばいいのか、61人の学生にどうすれば私ひとりで人形の作り方をわかりやすく教えられるか、経済学部の男子学生が人形を作れるのかなどが心配であった。モタンカ人形づくりをあきらめようかと思った時期もあったが、悩んでいた私に経済学部の伴先生と木暮先生が助けの手を差し伸べてくださり、モタンカ人形づくりに挑戦した。先生方、学部長室と図書館の方々、経済学部の学生たちの協力のおかげで、人形づくり体験を成功させることができた。

学生たちが丁寧に人形を作っているまじめな様子を見て、うれしい気持ち、驚いた気持ち、感謝の気持ちであふれた。経済学部の学生はセンスが良く、人形の服のデザインだけではなく人形の髪型もとてもきれいに完成させた。男子学生が、そこまで人形の髪型を上手に作れることにも感心した。作った人形に名前を付けた学生も何人かいた。

最後の授業で学生たちが提出してくれた感想文を読み、モタンカ人形づくり体験をあきらめないでよかったと思った。学生の手書きの文字が読めるか大変心配したが、皆が優しくて、丁寧に書かれた漢字の上に振り仮名を書いてくれて、涙が出るほど感動した。

注

1　「実践力育成F」の異文化制作実習において、伴はモタンカ人形づくりの準備と学生の指導に参画した。木暮は経済学部の広報委員としてサポートを行った。

2　時計回りにする場合は、②以下の指示で糸を沿わす側が逆になる。

3　ここで使用するボール紙は制作手順（4）と同じであるので、髪の色が決まっておれば、（4）の前に髪を作っておくとよい。

4　新聞紙1ページ分で重しを作って空洞の胴の下部1/3程度に入れると人形が安定して立つ。

参考文献

［1］　Pine II, B. J. and Gilmore. J. H. (1999), The Experience Economy. Harvard Business School Press（電通「経験経済」研究会訳『経験経済エクスペリエンス・エコノミー』流通科学大学出版、2000年）。

［2］　Prahalad, C. K. and Rawasmamy, V. (2000), “Co-operating Customer Competence”. Harvard Business Review, January February, 79-87.

［3］　Schmitt, B. H. (1999), Experiential Marketing : How to Get Customers to Sense, Feel,Think, Act, and Relate to Your Company and Brands, The Free Press（嶋村和恵・広瀬盛一訳『経験価値マーケティング：消費者が「何か」を感じるプラスαの魅力』ダイヤモンド社、2000年）。

[4] Vargo, S. L. and R. F. Lusch (2004), “Evolving to a New Dominant Logic for Marketing,” Journal of Marketing, Vol. 68 No. 1, 1-17.

謝辞

Iryna Parkhomenko 先生にはモタンカ人形づくりの指導と、モタンカ人形写真の掲載許可について厚く御礼申し上げる。

体験学修の場所として有瀬図書館５階の「ラーニングコモンズ」を活用するに当たり、図書館統括責任者の新田充保氏はじめ図書館の皆様にサポートをいただいた。また経済学部長室の方々にも準備段階から支援をいただいた。ここに感謝申し上げる。